

「面白さ」を伝える方法

國松淳和

南多摩病院 総合内科・膠原病内科

本特集のねらいは、実にシンプルである。読者に免疫や炎症を「面白い」と思ってもらえることである。「免疫」や「炎症」という生体現象は、本当に面白い。まったく興味・関心が尽きない。



私は、何かの面白さを伝える時に、その面白さを最も効率よく強く伝える方法を知っている。それは、周りのことなど一切気にせず、その人自身が誰より楽しみ、そして、その楽しんでいるところを見せることである。

オリンピックなどスポーツ観戦をしていて、実況や解説者が、自分の仕事を忘れて興奮したり夢中で自分の私見を言っていたりするのを聞くと、こちらもついつい惹きつけられてしまう。ゲーム実況や将棋の解説動画などもYouTubeで視聴できるが、正直、一切何を言っているかわからないことも多い。しかし面白い。その内容をよく知る人たち（場合によって、その一線の人たち）が夢中で楽しそうに騒いでいるのを見ると、見ているこちららはぜんぜんそれを理解できないのに、なぜだか面白いのである。

免疫や炎症は面白い。完全に個人的な好みだが、免疫・炎症がらみで最も大好きでツボなのは、「免疫チェックポイント阻害薬による免疫関連有害事象（irAE）」（p.42）と「免疫再構築症候群」（p.47）、そして重症の「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）」（p.28）の免疫学的病態生

理である。この3病態は、掛け値なしに面白い。まあ、つまり“推し”である。これらの病態は、免疫の振る舞いとして興味深さが頭抜けているし、理解できたら免疫や炎症というものが“みえる”ようになった気になれる。

自分が免疫や炎症をテーマに企画をするなら、この3つはぜひ誰かに書いてもらいたいと思った。

他の項目、すなわち目次全体をまずは眺めてほしい。一見、ぜんぜんまとまりがない、共通性がない、バラバラ…などの感想を抱くかもしれない。特にⅠ章は各論的な、すなわち“病名”だけが並んでいてドライに思われるかもしれない。しかし、それは仕方がない。私は「面白さ」を伝える一番良い方法を知っているとすでに述べた。本特集のコンテンツは、要は今の私が読みたいものたちで構成されている。読者を気遣い面白さを伝えようと十分配慮するというより、私が面白そうだと思うことを、私が書いてほしい人に、リラックスして書いてもらおうと思った。これが本特集のコアである。

私ならびに私たち執筆陣が、読者のことを気にせず誰より楽しみ、面白いと思っていることを夢中でまとめることができたなら、それが免疫や炎症を「面白い」と読者に思ってもらえる一番の方法であると信じているし、実際そのような特集に仕上がったと信じている。

